

垣根越えた連携 不可欠

高齢者に多い大動脈弁狭窄症。昨年十月に保険適用されたTAVI（経カテーテル大動脈弁留置術）は、外科手術とカテーテル治療の双方に対応したハイブリッド手術室で、循環器内科医と心臓血管外科医を含めた「ハートチーム」で実施するのが特徴で、体の弱った高齢者にも治療の道が開かれた。診療科の垣根を越え、息の合ったチームづくりが求められている。

（編集委員・安藤明夫）



心臓血管病専門病院の豊橋ハートセンター（愛知県豊橋市）で開かれたカンファレンス（検討会）。ミーティング室の壁に女性患者（左）の大動脈の画像が映し出された。心臓血管外科医の小山裕さん（三）が、翌日のTAVIに携わる看護師、臨床工学技士、放射線技師などに手順を説明していく。

折り疊んだ人工弁を、カテーテルという細い管に入れて心臓部へ運び、バルーンを膨らませて人工弁を広

げ、留置する治療。カテーテルを挿入する経路は、太ももの血管を通して心臓まで運ぶ方法（TF）と、肋骨の間から入れる方法（TA）とがある。体の負担はTFの方が小さいが、今回は小柄な患者で血管が細いため、TAを選択した。

小山さんがカテーテルを操作し、ワイヤ操作など補助を務めるのは循環器内科医の山本真功さん（三）。フランスでTAVIの経験を積み、昨年、同センターに

来た。TFの場合は山本さ

経カテーテル大動脈弁留置術

血管治療 最前線

がメイン、小山さんがサブに回る。

同年代の二人のやりとりを中心に、カンファレンスは進んでいく。カテーテルのサイズ、輸液の量……。体力の弱った患者の治療を追求しすぎると、体の負担を高める場合がある。やりすぎはやめて、八十点でいいところ」で一致した。

高齢者の負担少なくて

同センターは愛知県で初めてのTAVI実施施設。今年二月以降、約三十例を実施した。手術に携わる医師は三人で、TFは内科医二人、外科医一人。TAは外科医二人、内科医一人の編成だ。

「フランスから帰って、TAVIをやる医療機関を探していました。心臓カテーテルの分野では世界的に有名な豊橋ハートセンターから誘われ、いい連携ができそうだなと思いました」と山本さん。

小山さんは「外科手術がうまくいっても、高齢者は六十代、七十代の患者が希望しても外科手術を勧めることが多く、患者説明を二人で分担することもある。同じ系列の名古屋ハートセンター（名古屋市中区）もTAVI実施施設の申請中で、認められれば山本さんが名古屋に移って治療の責任者を兼任する予定だ。

△ TAVIの関連学会でつくる協議会では、手術実績や設備機器、人員などの施設基準やハイブリッド手術室に関するガイドラインを設けており、現在、全国で三十四施設が認定されている。

①ハイブリッド手術室で行われるTAVI治療 ②カンファレンスで意見を交わす山本真功さんと小山裕さん（左から二人目）。いずれも愛知県豊橋市の豊橋ハートセンターで



入院中に体力が落ちやすいのが悩みだった。体の負担が圧倒的に少ないTAVIはありがたい。内科医のカテーテルを扱う力量はすごいけど、何かあれば僕たちの出番。日頃からのチームワークが結果に直結する」と話す。

同センターではTAVIは八十代以上を原則にしている。人工弁の耐久性のデータがまだ乏しいためだ。

大阪大では最低週一

△ TAVIと外科手術 大動脈弁狭窄症は高血圧、むくみ、息切れなどを引き起こし、重症になると突然死につながることもある。外科手術は開胸して人工心臓で血流を調整し、弁を取り換える。手術は平均4〜5時間。約2週間の入院を要する。TAVIは開胸せず、TAで2〜3時間、TFで1〜2時間、1週間から10日の入院で済む。

中部地方は豊橋ハートセンターのほか、聖隷浜松病院（浜松市中区）、岐阜県総合医療センター（岐阜市）、静岡市立静岡病院（静岡市）の計四カ所。協議会長で、二〇〇九年からTAVI治療に携わってきた澤芳樹・大阪大心臓血管外科教授は、「多職種

回、カンファレンスを開き、議論を重ねて診療科の都合にとらわれずに治療方針を決めている」と話す。

保険適用で患者の負担は軽減されたが、診療報酬は約四百万円。「医療経済的にみて、この治療の大きな問題。どの患者に適用するか、各施設のハートチームが責任を持って判断していく必要がある」という。